

統計不正問題の深層(5)

統計作成過程から問題の本質を理解する

2019年03月14日
13:30 ~ 15:00
日本記者クラブ

平田英明
法政大学経営学部教授
h-hirata@hosei.ac.jp

1

© Copyright Hosei University

統計の目的



- ◆ 「経済統計」の本来の問題意識は、経済情勢の的確な数値化
 - ただし、「公的統計」は、必ずしも「純粋な」経済統計ではない
 - 統計法の中に「経済統計」という言葉は出てこない

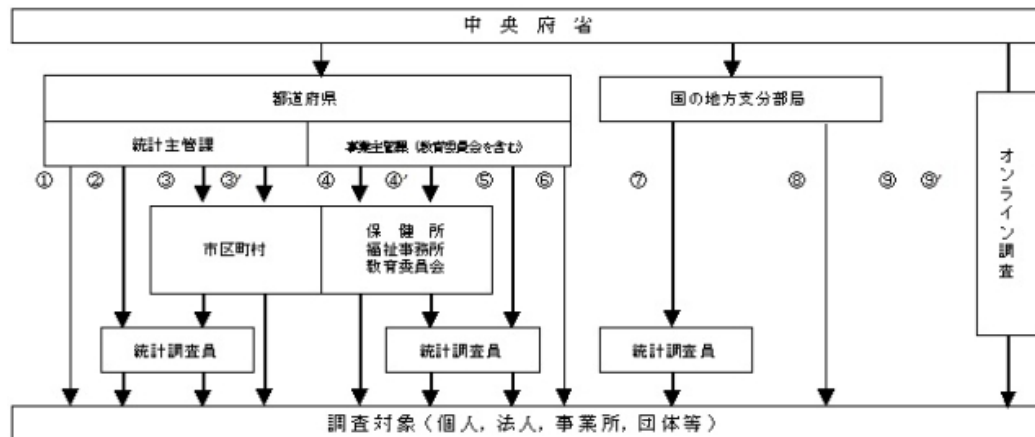
- ◆ 公的統計＝「行政利用だけでなく、社会全体で利用される情報基盤」
 - 毎勤の厚生労働省における利用目的の大半は行政サービス
 - ✓ ①失業給付の額の算定、②労働災害の休業補償、③労災保険の保険給付、④平均賃金の算定、⑤各種審議会等の審議資料、⑥労働時間短縮の推進、⑦労働経済の分析
 - ✓ 狭義の行政サービス関連の社会的コストと同様、経済政策の企画立案に生じた歪みという社会的コストも大きい

2

© Copyright Hosei University

統計の作られ方

- ◆ 作成には「①生データ取得」と「②集計作業」の2工程
 - ①＝調査員の訪問調査、郵送調査、オンライン調査(@現場、下図)
 - ②＝何らかの重み(ウェイト)をつけて集計(@霞が関)
 - ✓ウェイトは随時更新が望ましいが、実際には低頻度で更新
- ◆ ①と②ともにルールの遵守が基本



統計の作られ方

- ◆ ③企画(@霞が関)
 - 「①生データ取得」と「②集計作業」の方法論を決める
 - 効率的かつ持続可能な仕組みの必要性
 - ✓全数調査 vs. サンプル調査 → コスト(合理性)と頻度のバランス
 - ✓全国規模の全数調査を行う統計＝国勢調査、経済センサス
 - » 大半の統計が(少なくとも部分的に)サンプル調査導入
 - ③は多岐に亘る中長期的な課題を含む
 - » ウェイトの計算
 - » 業務効率化(例: サンプル手法についての検討)
 - » 経済構造変化への対応(例: 新業態の取り込み)
 - » 統計システムの変更等(例: データ処理システム)
 - » 国際基準への対応
 - 経験、知識、バランスの求められる難しい仕事

統計作成の宿命

- ◆ 統計作成者の評価のされ方は「非対称的」
 - 統計が公表されて当たり前(特に評価されない)
 - 統計に「問題(ミス or 不正)」が発覚すると厳しく糾弾される
 - ✓ 担当者のスタンスは保守的になりやすい→だからこそ、問題が生じれば、上司への報告をして、責任の所在を明確にして欲しいと考えるもの

- ◆ 統計作成者の忙しさは理解されにくい
 - 定例作業=②の集計作業→当たりの作業
 - 非定例の中長期的な課題(③)の解決は時間を要し、永遠にゼロにならない

- ◆ 統計作成は究極のチームプレー
 - 適切な統計作成業務体制(含・システム対応)による愚直な作業
 - 最悪なのが「よくわかっていない」上司の着任

統計作成過程と不正

- ◆ 歴史的に見ると表に出てくる不正の大半は①生データ取得
 - 例:調査員による不正な調査票作成、架空報告など

- ◆ 今回の不正は②集計作業と③企画に関わる不正のため、「想定外」であり「たちが悪い」
 - もはや性善説ではなく、性悪説をベースに考えていく必要?
 - ミスと不正(=決めたルールを守らないこと)は違う
 - ✓ 先人への忖度によるミスの隠蔽&事なかれ主義(明確な不正)
 - ✓ 専門性の欠如による失敗(能力不足によるミスだが、コンプラの問題でありルール違反である以上は不正であるし、モラル面の問題も。また、その人事配置をした組織にも責任)

- ◆ 他にも不正の起きる可能性はある
 - 例:公表に関わる不正(事前漏洩)

統計が軽視される(根が深い)理由 — 内生的改善には限界

◆ 真とフェイクの識別が難しい

- プロセスは何であれ、結果としての統計数値だけが世に出てしまう
 - ✓ 統計委員会であれ、外部エコノミストであれ、確認は難しい
 - ✓ 担当部署にモラルがなければ、手抜きをしてもスルーされてしまう可能性
 - ✓ 手柄にしにくい(異動した後で他人の手柄に?)

◆ 霞が関内における統計リテラシーの低さ

- EBPM (Evidence-Based Policy Making)という言葉の独歩
 - ✓ KKO(勘と経験と憶測)重視の時代ではないが...
- 統計は「国ドック」の基礎情報であることを認識していない
 - ✓ 検査結果が低質では、的確な問診・診察は不可能
- 統計の目的に関する理解の問題
 - ✓ 経済構造の変化(例:高齢化、共働きの増加)に対応しようがしまいが、統計は作れる vs. その部分を考慮しなければ、質の担保された統計は作れない

今回の問題の教訓～3つのツケ

◆ 霞が関における統計へのリソース配分の低下のツケ

- 起こるべくして起きた不正 → 点検検証の必要(後述)
- 構造的問題
 - ✓ 毎勤に限らず、公的統計全般で「回っていない」状況(実は基幹統計ですら掲載漏れ、公表期日の遅延等が頻発)

◆ 統計委員会にオンブに抱っこのツケ

- 権限はあれども、統計委員会事務局は15名程度の小所帯
- 統計委員会委員は全て非専属
 - ✓ 委員はわが国でも最高レベルの陣容であり、これ以上は望めない
 - ✓ 大学教員には専属になるインセンティブは基本的に低い
 - ✓ 「制約条件付き最適化」までを常に考えてくれるわけではない

◆ ゼネラリスト志向のツケ

- 統計の専門家養成の必要
- ローテーションの長期化の必要

統計と分析の距離感

- ◆ 今回の政治問題化の原因はチャイニーズウォールの不備
 - チャイニーズウォール(万里の長城):利害や目的の異なる職場間の守秘のための情報隔壁 ≈ 李下に冠を正さず
 - アベノミクス演出説には個人的に超懐疑的
 - ✓ 演出したいなら、もっと簡単にできる
- ◆ 統計を統計として作ることの大切さ
 - 同時に、統計の使われ方の理解も必要不可欠
- ◆ 「統計と分析(メーカーとユーザー)」の関係は「素材とシェフ」
 - お互いを尊敬し合い、車の両輪として政策に貢献する意識の必要
 - 分析と統計作成は峻別されるべきだが、インタラクションすることで、「認知ラグ」や「診断ミス」につながる統計の陳腐化を防ぐ
 - ✓ デフレ認識、不良債権認識の認知ラグの社会的コストは膨大
 - ユーザーニーズを踏まえつつ、メーカーの矜持を持って統計作成を
 - ✓ ユーザーニーズの悉皆調査=統計委員会による委託調査研究「政府統計の利活用状況及び民間における統計の作成状況に関する調査研究」

統計専門機関を作れば済む話か

No! 「制約条件付き最適化」を考える必要

- 統計委員会のでこ入れでは限界

要件1:統計作成部署の独立性の確保

- 同時に(今時経験を踏まえ)ガバナンス構造に最大限の気配りを

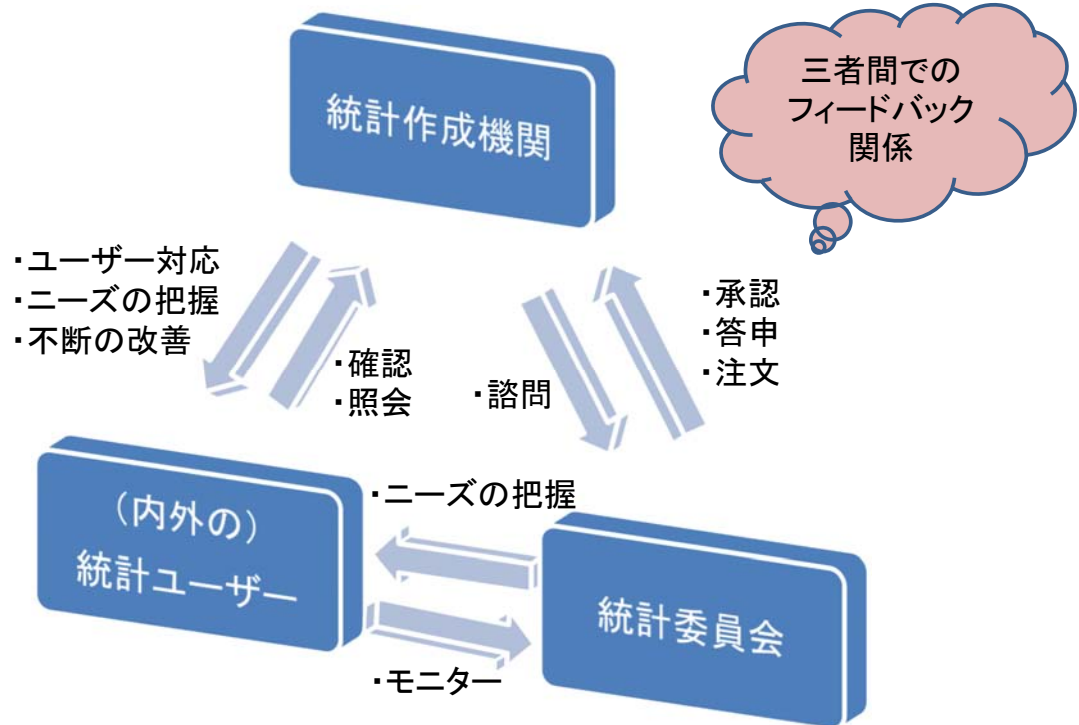
要件2:統計のスペシャリストの採用・養成の必要

- 統計担当者のインセンティブメカニズムへの心配り
 - ✓ 末端の調査員までを含めた統計作成に関する人事管理(採用や人事評価→専門部署で昇進していける仕組み)・労務管理(特に勤務時間)に関する問題意識を持つ必要
- 海外の統計部署の企画担当者は原則として院卒

要件3:霞が関内外の統計部門や分析部門とのインタラクション

- 末端の地方自治体の統計担当部署、海外の統計局
- 白書担当者、学者、エコノミスト

理想的な三者関係 ～官民一体となった統計の育み



「点検検証」に向けての感想

- ◆ 予備調査に相当する書面調査票の中身は及第点
 - 問題は回答者が点検検証部会の意図を理解して回答できるか否か
 - 鍵は部会メンバーのWGによる書面調査後の面談調査

課題1: 責任の所在に関する解明の不十分さ

- ヒエラルキー構造にまでしか踏み込めていない
- 「再監」体制やトラブル発生時の対応体制

課題2: 管理職、担当者のローテーション情報の未確認

- 専門家の必要性を各府省庁が組織として認識していたかの目安

課題3: 作成府省庁の当該統計に関する重要性認識の未確認

- 必要性の確認を通じたスクラップ&ビルドの方向性の必要